霜野おつかい
イラスト イセ川ヤスタカ

君が裏切る前に、ちょうだい

World End Chronicle
Before you betray the world
Story by Shimono Otsukai
Art by Isegawa Yasutaka

ワールドエンド クロニクル

特別試読版 ep 1

GA文庫

相反する少年少女が
世界を再構築する
ヒロイックファンタジー!

世界を救うため、
彼女と手を取り合い戦え——

私が世界を
滅ぼす前に、
どうか私を
殺してちょうだい

prologue

プロローグ

World End Chronicle
Before you betray the world

これは、世界を救うための正当な行為だ。

虫も鳴かないような静かな夜。

舞台はトランヴァース王国郊外に建つ、とある屋敷の、とある部屋だ。

月明かりが差し込むその一室には豪奢（ごうしゃ）な家具が並び、奥には大きな寝台が置かれている。

「うみゅ……う」

そこには美しい少女が眠っていた。

年のころは十代半ば。オフショルダーの薄い寝巻の下には、豊かに育った肢体がかすかに透けて、純金を溶かしたような長い髪が波紋のようにシーツの海に広がっている。

小さな唇からこぼれ出るのは穏やかな寝息。

このまま朝が来るまで、彼女はこんこんと眠り続けることだろう。

そんな少女のことを……ベッドのそばで、じっと見つめる影がいた。

「……」

影は、少女と同じ年頃の少年だった。

髪も目も、闇に溶けるような純黒。魔道騎士の制服を

着こんでいてもわかるほど体軀（たいく）はよく鍛えられており、少女を映すその瞳（ひとみ）には強固な光がともっていた。

少年は無言のまま、懐（ふところ）から小ぶりなナイフをそっと取り出す。

音もなく鞘（さや）から抜き放てば、現れるのはすこし欠けた刀身。

一見してわかるくらいの、大量生産の安物だ。

だが少女ひとりをこの世から葬り去るくらいのことはできるだろう。

「……」

少年は軽く瞑目（めいもく）する。

彼にとって、少女はかつて愛したひとだった。

同時に、かつて憎んだ仇敵（きゅうてき）でもあった。
それをやっとこの手で殺せるのだ。
煮え立つような高揚感が、わずかに残っていた少年の迷いを根こそぎ刈り取っていく。
少年は決意とともに目を見開いて――。
「っ……！」
躊躇（ちゅうちょ）なく、少女の心臓めがけてそのナイフを振り下ろした。
これで未来は救われる……はずだった。

一章　終わる世界

トランヴァース王国。

それはかつてこの大陸で栄華（えいが）を誇った王国の名だ。

だが、今やその姿は見る影もない。

海沿いに広がる山脈を背にして広がる都は完全な廃墟（はいきょ）と化していた。

広がる街並みに刻まれているのはいくつもの巨大なクレーター。それを起点にして地割れが広がり、建物のほとんどが倒壊して瓦礫（がれき）の下には野晒（のざら）しの人骨が散乱している。

もちろん住んでいる者はひとりもいない。
七年前に襲った災厄によって国は一夜にして滅んだのだ。
灰色の曇天（どんてん）から霧のような雨が降（ふ）り注（そそ）ぎ、死んだ都をしとどに濡（ぬ）らしている。
そして今その都を見下ろす丘で、ひとつの決着がつこうとしていた。
それは――世界の命運をかけた死闘だった。
「がはっ……！」
衝撃波を真正面からもろに受け、男は地面に転がった。
黒いローブを目深（まぶか）にかぶった、二十代半（なか）ばの青年だ。
その名を、クロウ・ガーランド。

やけにぎらつく双眸(そうぼう)も、短く切りそろえた髪も、夜空のように深い黒。

ローブの下の肉体はよく鍛え上げられているものの、裂傷や火傷(やけど)でどこもかしこも血まみれだ。生きているのが不思議なほどに、彼は満身創痍(まんしんそうい)だった。

だが、あたりにはクロウ以上の傷を負った死体がいくつも転がっている。

人間、竜人、獣人……さらにはエルフ族まで。

種族や国家の垣根を越えて集結した義勇軍。

およそ千の兵士たちの、なれの果てである。

（はっ……これだけの軍勢を集めても、あいつには敵(かな)わないのかよ）

クロウは唇を噛(か)みしめて土を掻(か)く。

そんな彼の耳に、凛(りん)とした声が刺さった。

「いい加減、諦(あきら)めたらどう？」

「っ……！」

目の前、わずか数メートルの先にひとりの女が立っていた。

長い金の髪に、シアンブルーの瞳(ひとみ)。

面立ちは寸分の狂いなく流麗(りゅうれい)な線を描き、ぞっとするほどの冷たい美をたたえている。

小柄な体にまとうのは漆黒(しっこく)の鎧(よろい)だ。鬼神めいたその禍々(まがまが)しい造形と、女の美しさとが調和してやけにさまになっていた。

この場で生きているのは、おそらくこの女とクロウのみである。

そして彼女こそが……この死体の山を作り出した張本人でもあった。

女はあたりを見回して重いため息をこぼしてみせる。

「どれだけ足掻(あが)こうとも無駄よ。聖遺物は渡さないわ」

「渡さない、ねえ……よく言うぜ。元はと言えばそいつは全部、おまえがあちこちから盗み出したもんだろうが。いくつもの国を滅ぼしたうえでな」

「……ええ、そうね。言い訳はしないわ」

女は重々しくうなずいて、腰の短剣をゆっくりと抜き放つ。

柄(つか)も刃(やいば)も、墨で固めたようなひと振りだ。持ち手は血のようなしみでひどく汚れており、その刀身には隈(くま)なく奇怪な魔術文字が刻まれている。

一目見るだけでわかる異様なそれを、女は見せつけるように翳(かざ)してみせた。

「この聖遺物、黒陽剣(こくようけん)も……七年前にトランヴァース王国を滅ぼして手に入れたものよ。ほかにもいくつもの国を滅ぼして多くの命を犠牲にしたわ」

トランヴァース王国、深緑(しんりょく)の谷、東龍(とうりゅう)共和国……。

名だたる大国が、この数年間ですべてこの女の手によって滅ぼされた。

その目的はいたってシンプルだ。

各国が保有する究極の魔道具――聖遺物を強奪(ごうだつ)すること。

「この七年で五つの聖遺物を手に入れたわ。最後のひとつも、じきにこの手に入るはず。そうすれば……私の願いはようやく叶(かな)うの」

「……願い、ねえ」

倒れたまま、クロウは乾いた舌を無理やり動かす。

降りしきる雨が体温を奪い、一音紡(つむ)ぐだけでも体が軋(きし)む。

それでも女をにらむ瞳にはありったけの憎悪を込めた。

「いまさら何を願うっていうんだ。聖遺物を集め切れば……この世界は終わるっていうのに」

「あら、よくご存じね。考えの足りないバカじゃないんだ」

「はっ。魔神の伝説なんてガキでも知ってるだろ」

魔神。

それは、三百年前にこの世界を襲った脅威の名だ。

ことは異なる、魔界と呼ばれる世界から訪れた異邦の存在。

魔神は魔界の住人――魔族を率いてこの世界に渾沌（こんとん）をもたらした。あらゆる種族が一致団結し、魔神に抵抗したものの、その侵略を止めるには至らず世界は滅びを待つだけだった。

だがしかし、ある日魔神はたったひとりの人間によっ

てあっけなく倒されてしまう。

「魔神を倒した英雄は魔界につながるゲートを封印して、この世界に平和を取り戻した。その封印の要になったのが、聖遺物。魔神が所持していた魔道具だ」

それぞれ壮絶な力を有した奇跡の魔道具。

計六つのそれらの力を利用して、英雄は魔界とこちらをつなぐ門を閉ざした。

その後、聖遺物は世界のあちこちでばらばらに保管されることになる。

なぜならば――。

『ふたたび聖遺物がそろったとき、封印が解けて魔界への門が開くだろう。だからゆめゆめ……聖遺物を動かさ

ぬように』

かの英雄がそう言い残したからだ。

だがしかし、その聖遺物がもうこの場に五つも揃(そろ)ってしまっている。

「あとひとつで、魔界の門が開く。そうなったらもうお しまいだ。魔族がこっちの世界にやってきて……三百年前の繰り返しだ。世界は今度こそ終わりを迎える」

不死に近い肉体を持ち、絶大なる魔力を有する魔族たち。

彼らを前にして、弱り切ったこの世界が対抗できるとは思えない。

かつて世界を救った英雄はとうに鬼籍(きせき)に入っているの

だ。

「世界を滅ぼしてまで叶えたい願いっていうのは……いったいどんな願いなんだよ」

「……さあね。無駄話はここまでにしておきましょう」

女がゆっくりと黒陽剣を持ち上げる。

その先端から生じるのは漆黒の雷だ。

最初は小さな火花でしかなかったそれが、瞬(またた)く間もなく巨大に成長していく。まるで虚空(こくう)にそびえる大樹の根だ。絶大な熱量が空気を熱し、逆巻く風がふたりを叩(たた)く。

「あなたに恨みはない。でも……」

宝石のような澄んだ瞳がクロウを射抜く。

だがその美しさには一切(いっさい)の迷いが感じられなかった。

女は険しい形相（ぎょうそう）でその雷剣を揮（ふる）う！

「私にはなにを犠牲にしてでも……成し遂げなきゃならない願いがあるのよ！」

瞬間、大気が震え、刃の先端から黒が奔（はし）った。

それこそがトランヴァース王国を一夜のうちに葬り去った魔神の鉄槌（てっつい）。

天駆けるそれが、むせ返るほどの熱波とともに真っすぐクロウに迫りくる。

「……ここまで、か」

今の自分にはあれを避ける体力も、防ぐ魔力も残ってはいない。

クロウはただ静かにまぶたを閉ざす。

その裏に浮かぶのは、今は亡き故郷の光景だ。孤児院の仲間たちに、よくしてくれた幼馴染（おさなじみ）、魔術を教えてくれた師匠……平和でおだやかな祖国での日々が走馬灯のように蘇（よみがえ）る。

そして最後に浮かぶのは……とある少女の笑顔だった。

「じゃあな、リィン。世界の誰（だれ）より愛していたよ」

「っ……！」

その瞬間。

黒雷がクロウの眼前で軌道を変えて、すぐ背後にたたずむ岩を木（こ）っ端（ぱ）みじんに砕いてみせた。その轟音（ごうおん）が過ぎ去れば、耳が痛むほどの静けさが去来する。

やがて、女が黒陽剣を取り落とす。

「そんな……まさか……」

肩を震わせ後ずさるその様は、世界を破滅に追いやろうとする悪魔にはとうてい似つかわしくないものだった。

舌をもつれさせながら、女は問う。

「あなた、ひょっとして……クロウ、なの？」

「へえ？　なんだ、忘れられたもんだと思っていたが……意外だな」

クロウは腰を落としたまま、ゆっくりと顔を上げる。

ローブのフードを上げてその素顔を晒（さら）してやれば、女は声にならない悲鳴を上げた。

「久しぶりだな、リィン。俺（おれ）だ。クロウ・ガーランドだよ」

「なんで……⁉　どうしてあなたが、こんなところにいるのよ⁉」

「はっ、そんなの決まってるだろ」

彼女と会うのはずいぶん久々だ。

いろんな感情がないまぜとなって、浮かべる笑みはひどく歪（ゆが）んだものとなる。

かつて、クロウはこのトランヴァース王国で生まれ育った。

そしてまだ少年だったころに彼女と出会い――特別な関係となったのだ。

「世界が終わる前に……かつての恋人に会いに来たんだよ」

「っ……！」

リインはますます顔をひきつらせ、口元を覆(おお)うばかりだった。

言葉を失う彼女とは対照的に、こちらの口は異常によく回り始める。

「おまえと最後に会ったのは七年前だな。今でもはっきり覚えてるよ」

クロウはゆっくりとかぶりを振る。

「おまえがトランヴァース王国を滅ぼした日のことは……忘れようたって忘れられないよ」

「っ……クロウ、私は――」

「はっ。まんまと騙(だま)されたよ、リィン」

何事かを口にしかけた彼女の言葉を遮(さえぎ)って、クロウは続ける。

言い訳や謝罪の言葉、開き直りも、なにひとつとして聞きたくはなかった。

七年前。

脳に刻みつけられた記憶が、まざまざと蘇る。

だがその記憶は赤黒く変色していて、クロウの頭にひどい痛みを生じさせた。

「今でもはっきり覚えているよ。事の発端は、ある日おまえが……奇妙なことを頼んできたんだよな」

聖遺物のひとつ、黒陽剣。

リインは、それを見たいと言い出したのだ。

だがしかし、黒陽剣はトランヴァース王国で厳重に保管されており、国王ですら触れることを許されない宝物だった。当然、見学の許可など下りるはずがない。

それなのに、クロウはなんとかしてリィンの願いを叶えてやろうと奔走した。

なにしろ当時の彼女は、とある事情からほとんどの自由を制限されていたのだ。

そんな不憫（ふびん）な恋人のわがままを聞いてやらねば男が廃（すた）ると、本気でそう思った。

だが、その結果――。

クロウは顔を覆って憎悪を叫ぶ。

「あんな馬鹿（ばか）げた頼み事、無視すりゃよかったんだ

……！　それなのに俺は……おまえに協力してしまった……！」

聖遺物が保管されている場所に至るまでの道のりや、警備の入れ替わるタイミング。

クロウは入念な下調べをして、リィンを聖遺物のもとに導いてしまった。

厳重な封印が施されていると聞いていた宝物庫は、なぜかそのとき見張りがひとりも立ってはおらず、カギもすべて外れていた。おかげでひどく拍子抜けしてしまったのを覚えている。

だが、そこからの記憶はあいまいだ。

気付けばクロウは朝日のもと、倒壊した宝物庫の隅で

ひとり倒れていた。
あたりは火の海と化していて、聖遺物とリィンはその場から消えていて。
慌てて都に戻ってみれば――。
「俺は……あの日の光景を――生忘れない！」
そこに広がっていたのは、凄惨（せいさん）な地獄だった。
街の随所に刻まれた巨大なクレーター。それを起点に広がる地割れ。
ちょうどこの丘から見える光景だ。
それにあのときは、炎と悲鳴が加わっていた。
あとで聞けば漆黒の雷が国の全土を襲い、ありとあらゆるものを焼き尽くしたのだという。

あちこちに真新しい死体が転がる街並みを、クロウはリインを探して駆けずり回った。しかし彼女の姿はどこにもなく、ただ数多くの知人たちの亡骸（なきがら）を見つけるだけだった。

この事件によって国王ならびに王族のほとんどが死去。国民の約八割が死亡、もしくは行方（ゆくえ）不明。

大陸一の大国として名を馳（は）せていたはずのトランヴァース王国は、一夜のうちに滅び去った。

その後、絶望に沈むクロウのもとに耳を疑うような噂（うわさ）が届く。

黒陽剣を持った少女が、各地で聖遺物狩りをしているという噂を……。

「おまえは最初から、俺を利用するつもりだったんだろう！　恋人なんて……聖遺物を盗む手伝いをさせるための方便でしかなかったんだ！」

「たしかに私は……あの日、あなたを利用した」

リィンは深くうつむき、たったそれだけの言葉をしぼりだした。

雨の音にかき消されてしまいそうなほどにか細い声だ。

その立ち姿は隙（すき）だらけ。顔は固くこわばり、黒陽剣も地面に転がったままである。

だからクロウは……尽きたはずの己（おのれ）の命がふたたび音を立てて燃え上がるのを感じるのだ。

この七年、心身がすり減るほどの過酷な修行に耐え、

様々な魔術を会得した。
それはすべて――この日のためだった。
「俺はおまえに騙されて、償い切れない罪を負った！
だから、せめてものケジメのために……！」
右手を突きだし、しゃにむに叫ぶと同時。
「おまえをいつか必ずこの手で殺すと、決めたんだ！」
クロウの影がぐにゃりと、蠢き（つごめ）、地面を突き破るように
して躍り出る。
それが形作るのは異形の怪腕。鎌（かま）のように鋭い五本の
鉤爪（かぎづめ）を有したその腕が、瞬く間もなくリィンめがけて肉
薄する。
影を操（あやつ）る高等魔術。

影導魔術、第一階梯（かいてい）《投影（シャドーアーツ）》。
クロウの持ちうる手札の中で、唯一彼女に届く魔術である。
文字通り、最後の力を振り絞った一撃だった。
「でもクロウ！　私は、あなたを……！」
影の怪腕が彼女の身体に届く、その寸前。
「させぬ」
「がぐっ⁉」
鈍い衝撃。それと同時にクロウの視界が赤黒く染まった。
リィンの返り血？　――いや、違う。
なにかが自分の身を襲ったのだと理解してすぐ、息の

かわりに大量の血を吐いた。

ゆっくりと己（おのれ）の身体を見下ろす。腹から生えているのは、一本の銀の槍（やり）だ。

背中から刺さったそれは見事に体を貫通しており、先端から真新しい鮮血がしたたり落ちる。

「なっ、に……!?」

「クロウ!?」

「邪魔立てするなよ、人間」

リィンの悲痛な声とは対照的な、平坦（へいたん）な音。

クロウは串刺しになったまま、無理やりに顔を上げる。

影の怪腕を押しとどめていたのは、見知らぬ人物だ。

身にまとうのは、やけにカラフルな道化じみた衣装で

ある。

その体つきから女性だと思われるが、顔の半分以上を覆い隠す仮面によって人相はわずかにもうかがい知れない。

その背中に生えるのは見るも美しい六枚羽。

虹色に輝くそれをはためかせ、道化は静かに告げる。

「こちらにおわすは、我が主（あるじ）。何人たりとも害することは許されぬ」

「ま、まぞ……く!?」

そこで、とうとう体が限界を迎えた。クロウがぐしゃりと倒れ伏せば、それと同時に影の腕は消え、雨で洗い流せないほどの血だまりがあっという間に地面に広がっ

ていく。

「クロウ……!?」

「主様（あるじ）」

悲鳴を上げ、こちらに駆け寄ろうとするリィン。

道化はそれを制止して、その場に跪（ひざまず）いて深く首を垂れてみせる。

立ち居振る舞いだけ見れば非の打ちどころのない忠臣だ。

だがしかし、その所作は完璧（かんぺき）すぎていていっそ慇懃（いんぎん）とも言うべきものだった。

「見事でございます、主様。ついに五つの聖遺物を収集せしめましたか」

道化は恭(うやうや)しく右手を差し伸べる。
そこには何かが握られていて――。
「約定どおり。あなた様にこの、最後の聖遺物を奉献いたしましょう」
「これ、が……」
それをリィンが震える指で受け取ると同時に、空が戦慄(わなな)いた。
「ひゃっ、な、なに!?」
突き上げるような揺れが大地を襲う。
しかしそれよりも驚嘆すべき異変が上空で起こっていた。
あれだけ雨粒を落としていた暗雲が、あっという間に

掻き消(き)える。そのかわりに空を覆うのは夕焼けよりも紅い赤だ。

やがてその空に、じわじわと黒い染(し)みが浮かび、明確な形を成していく。

それは紛(まご)うことなき扉だった。

見るも悍(おぞ)ましい怪物が彫り込まれたその扉が、ゆっくりと開いていく。

「すべての聖遺物が、あるべき主の手に渡った。ゆえにこれより、魔界の門が開きます」

扉の隙間(すきま)から見えるのは、ただひたすらに昏(くら)い闇(やみ)。

その闇が蠢いて、この世界にずるりと這(は)い出(で)てくる。

それは無数の人影だった。道化と同じ六枚羽を有するそ

れらが、けたたましい哄笑(こうしょう)とともに世界へ広がっていく。

魔族の侵攻が、とうとう始まったのだ。

「これでこの世界は完全に終わりを迎える。主様もそれを理解して、聖遺物を集めたはずでしょう」

「……ええ、たしかにそうだったわね」

リィンは重々しくうなずいてみせる。

クロウはただ血だまりの中で、その絶望的な光景を見上げることしかできなかった。

（結局俺は、なにも成し遂げられずに終わるのか……）

仇(かたき)を討(う)つこともできず、世界の崩壊を止めることもできず、ここで死ぬ。

弱々しい嘲笑(ちょうしょう)が口の端(は)に浮かび、またほんの少しの血

を吐いた。
もはや痛みも感じない。
ただ、どうしようもないほどの睡魔が彼を襲う。
（ごめんな、みんな……仇を取って、やれなくて……ほんとに、ごめん）
幼馴染のサクラ。
師匠のトリス。
もうこの世にいない人々に、静かに祈りを捧（ささ）げる。
無念さに唇を噛みしめるが……これから懐かしい彼女らに会いに行けるのだと思うと、死への恐怖は不思議と少なかった。
このままぶたを閉ざせば、きっともう、それで終わ

る。

抗いがたい眠気に誘われるままに、クロウは――。

「クロウ」

「っ……」

心地よいはずの眠りを、無慈悲にも妨げる声があった。

リィンだ。もうほとんど見えないクロウの目でも、彼女が自分の元へゆっくりと歩み寄ってくるのがわかる。

とどめを刺そうというのだろうか。

だが彼女はクロウのそばにしゃがみこみ、冷たくなりはじめたその手をそっと握った。

「あなたが私を恨むのは当然だわ。そして私には……あなたに償う義務がある」

「なに、を……っ!?」
クロウの手にそっとなにかが握らされる。
それを目にして、遠のきかけていた意識が一瞬でクリアになった。
「主様……その聖遺物は、あなたがもっとも欲していた物ではないのですか」
「いいのよ。私みたいな罪人よりも……彼の方が、きっと役立ててくれるはずだから」
咎(とが)めるような道化の言葉にリィンはただかぶりを振る。
クロウの掌に握らされたものの。
それは、ひとつの金の指輪だった。
よく磨き上げられたその表にも裏にも、奇怪な魔術文

字がびっしりと刻まれている。

「聖遺物、道標輪廻（どうひょうりんね）」

リインは優しい声で語り掛ける。

「それに願って。あなたには、その権利がある」

「はっ、いまさら……なにが変わるっていうんだよ」

世界は終わろうとしていて、クロウの命も尽きようとしている。

もうすべてが手遅れだ。

それなのに、リインは片目をすがめて笑ってみせる。

「本当にそう思うの？」

「なに……」

「あなたが手にしているのは聖遺物。この世界の理（ことわり）だっ

てねじ曲げる究極の魔道具よ。その力の一端を……あなたは知っているはずでしょう？」

「っ……変わるっていうのか、この最悪の状況が」

「……信じるも信じないもあなた次第よ、クロウ」

リィンが囁（ささや）くように問いかける。

「さあ。あなたの願いは、いったいなに？」

クロウの願い。

それは、リィンを殺すことだ。

だが、なぜかこのときはもっと別の願いが胸に浮かんだ。

それはどう考えても叶うはずのない……夢物語のような願望だ。

この指輪に祈ったからといって、なにが変わるかもわからない。

そもそもこんな腹に風穴の空いた死にぞこないに、できることなどあるはずがない。

それでも藁（わら）にもすがる思いだった。血と泥だらけの上体を起こし、衝動に突き動かされるままに指輪をぎゅっと握りしめる。

自身の願いを強く心に描く。

夢物語のようなそれは――。

「俺の、願いは……！」

滅んだ国々を蘇らせることか。

死んだ人々を生き返らせることか。

魔界へつながる、あの門を閉ざすことか。

否――その、すべてである。

クロウは魂を震わせて叫ぶ。

「この世界に降りかかった災厄を……すべて、なかったことに！」

――御意、主様。それが汝の願いとあらば。

厳かな女の声がどこからともなく響いたその瞬間、指輪がカッと熱を帯びた。

それと同時にまばゆい光があふれ出す。光は何条もの帯と化し、クロウの身体をからめとって中空へと浮き上がらせた。その光が肌を撫ぜる感覚に死にかけの肝が縮

み上がる。

触れただけで理解した。

この光は、高濃度の魔力そのものだ。

「っ、リィン……！　この指輪は、いったい……!?」

「それはあなたの道を照らすもの。どうか大事にしてね。そして、どうか……」

視界が遮られ、唇になにか柔らかなものが触れた。

だが、すぐにそれは離れてしまう。リィンは唇にクロウの血をつけたまま、柔らかな微笑みを浮かべて……その頬（ほお）に、一筋の涙が落ちる。

「私が世界を滅ぼす前に、どうか私を殺してちょうだい」

「な、に……っ!?」

「約束よ。そうすれば、きっと世界は救われるはずだから」

光がさらに強くなる。

リィンの姿も、空の扉も、世界を覆う魔族たちの姿も、すべてが白に塗りつぶされていく。

「……やはり、こうなるのか」

忌々しげにつぶやく道化の声だけがかすかに届いた。

「待て！　リィン！　聞かせてくれ……！　どうして、どうしておまえは……！」

おもわずクロウは光の向こうへ手を伸ばす。

もう二度と彼女に会えない気がした。

だから……この七年もの間ずっと抱き続けていた疑問

を、彼女にぶつけるのだ。

「おまえは、なんでトランヴァース王国を……この世界を、裏切ったんだ！」

だがしかし、その答えが返ってくることはなく――。

光が、ついにすべてを覆い尽くした。

「っ……リィン！」

伸ばした手が空を摑(つか)み、クロウはハッとして跳ね起きる。

全力疾走した後のように、体中びっしょりと嫌な汗で濡れていた。

呼吸を落ち着け、あたりを見回す。

「え……どこだ、ここ？」

そこは、トランヴァース王国を見下ろす丘……などではなかった。

なんの変哲もない、ふつうの部屋だ。

その隅のベッドの上にクロウは寝かされていて、リィンやあの道化の姿はどこにもない。あたりをうかがおうと身じろぎして……はっと右手を見下ろす。

その人差し指で輝くのは、リィンから受け取ったあの金の指輪だった。

「……夢じゃなかったことだけはたしかみたいだけど。ここ、どこだ……？」

とりあえずクロウは精神を研ぎ澄ませ、あたりをうか

がう。

部屋の中にある家具といえば、簡素な机と椅子(いす)。あとは小さなクローゼットとベッドのみ。殺風景としか言いようのないその内装に、クロウの胸はなぜか無性にざわついていく。

自分はこの部屋を、かつてどこかで見た気がした。

おまけに着ていたシャツをめくれば、槍の刺さった形跡すら見当たらない。

誰かが白魔術で手当てしてくれたにしても、綺麗(きれい)に治りすぎている。

違和感だけがどんどん降り積もる。

そんな中、意を決してベッドから出てみようとするの

だが――。

「あれ、ようやく起きたの？」

「っ……！」

そこで突然声をかけられて、クロウの心臓は大きく跳ねた。

しかしもっと肝を冷やしたのは、その声の主をたしかめてからのことだった。

「……は」

「まったくもう。今日もお寝坊さんだね、クロウくん」

ドアが開き、そこからひとりの人物が現れる。

それは、なんの変哲もないひとりの少女だった。

まだすこし幼さの残るあどけない顔立ちだが、体つき

はふっくらと丸みを帯びていて、少女と大人の女性のちょうど中間のような魅力的なプロポーション。素朴な笑顔がよく似合い、過度な美しさこそ持ち合わせていないものの、誰からも愛されるような少女だ。

桜色の髪を飾るのは、カンザシと呼ばれる東の国の髪飾り。

身にまとうのは真新しい魔道騎士の制服だ。

ベッドの上のクロウを見て、彼女は困ったように眉(まゆ)を寄せる。

「朝に弱いのは学生のときからちっとも変わらないんだから。でもせっかく魔道騎士になれたんだから、もっとしっかりしないとダメなんだからね」

その声には甘い親しみが込められていて、耳に心地よくしみこんだ。

だがそんな少女を前にして、クロウは顔から血の気が失せていくのがわかる。

震える舌で、その名を呼ぶ。

「さ、サクラ……？」

「うん？　どうかしたの？」

小首をかしげる彼女の名は、サクラ・ナデギリ。

七年前にトランヴァース王国が滅んだ際に亡(な)くしたはずの……クロウの幼馴染だ。

「うっ、わあああああああああああ!?」

「へ……って、ちょっとクロウくん!?」

ベッドから転がり落ちるようにして、クロウは彼女から距離を取った。

こんなことあるはずはない。なにしろサクラはクロウがこの手で埋葬したのだ。

崩壊した都で彼女の亡骸（なきがら）を見つけたときの絶望感も、墓穴を掘る際に感じた土の重さも、供えた花の色も、鮮明に脳裏（のうり）に焼き付いている。

喉（のど）はからからに乾き、心臓は早鐘（はやがね）のようにうるさく鳴り響く。

「な、なんだよこれ……！　なんでサクラがここにいるんだ！　おまえは、たしかにあのとき……七年前に、死んだはずだろ!?」

「は、はい……？　私が死んだって……なに？　変な夢でも見たの？」

サクラらしき少女は怯えたようにうろたえてみせる。

その声も姿も表情までも、記憶と寸分たりとも変わらない。

いや、彼女が亡くなったときよりも、少しだけ若い気さえする。

（幻覚か……!?　でも、それにしては違和感が……っ!?）

わけもわからず、クロウはさらに後ずさる。

しかしすぐに背中が壁にぶつかった。そこでふと視線をやった先に、窓があった。

「……は？」

今度こそクロウは言葉を失った。

窓ガラスに映っていたのは平均的な体格に、平凡な顔立ちをした……少年だ。

間違いなくそれはクロウ・ガーランド本人。その、かつての姿だった。

二十五歳の、復讐（ふくしゅう）に取り憑（つ）かれ、暗い目をした男はそこにはいない。

そしてそのガラスの向こうに広がるのは――。

「トランヴァース、王国……？」

海に面した街並みだ。

大きな通りがいくつも走り、それに沿って家々が立ち

並ぶ。青く澄み切った海原には多くの船が行き交って、その頭上を一匹のドラゴンが悠々（ゆうゆう）と横切っていった。

小高い丘の上にそびえ立つのは純白の城。

巨大なクレーターも地割れも、なにもない。

平和だったころの祖国の姿が、そのままそこに存在していた。

そこでハッと気付くのだ。

この部屋は……自分がかつて祖国で暮らしていた寮の一室だということに。

「お、おい、サクラ！」

「ひぅっ、こ、今度はなに……？」

「教えてくれ！　今は……いったい何年なんだ!?」

「えええ……本当に今朝(けさ)はどうしちゃったの、クロウくん」

「いいから答えろ！　何年だ！」

「えええ……と、ちょうどトランヴァース歴三〇〇年だけど……って、ちょっとクロウくん!?」

その場にくずおれたクロウのことを、サクラがあわてて支えてくれる。

あまりのことに腰が抜けた。

だって、その年号は……。

（十年前じゃないか!?）

この国が滅ぶよりも、すこし前の時代だ。

ふつうなら信じられるはずもない。

だが……それを可能にする心当たりが、クロウにはひとつだけ存在した。

（この聖遺物の力なのか……？　俺はこの力で……過去へと、戻ったっていうのか!?）

その問いを肯定するかのように、指輪がかすかな熱を帯びた。

クロウはゆっくりと顔を上げる。

不安そうにこちらを見つめるサクラと、至近距離で視線がかちあった。

「……なあ、サクラ。もう一度教えてくれ。おまえ……本当に生きてるのか？」

「もう、しつこいってば。あのね、こんな元気そうな

幽霊がいると思うわけ？」

サクラは呆れたように肩をすくめてみせる。

そんな些細な仕草でさえ、やっぱり記憶にあるそのままで――。

「っ……サクラ！」

「ひゃうう……っ!?」

いてもたってもいられなくて、クロウは飛びつくようにして彼女を抱きしめた。

「なっ、なに!?　ほんとにどうし……クロウ、くん？」

サクラは耳まで真っ赤にして固まるが、すぐにはっとする。

彼がぼろぼろと涙をこぼしていることに気付いたのだ

ろう。

「ごめん……サクラ……ほんとに、ごめん！」

ずっと会いたいと願ってきた。

数え切れないほどに夢に見た。

クロウは彼女に、いや……この国のみなに、言わねばならない言葉があった。

「おまえだけじゃなく、みんなを死なせてしまって、本当にごめん……！」

「ええ……だから、私はこのとおり死んでないってば。もう」

サクラは戸惑いつつも、クロウの背中を優しくさすってくれる。

その手のひらはとても温かい。彼女が間違いなくそこにいる証拠だった。

「まだ出勤まで時間はあるし……落ち着くまで待っててあげるからね。どんな悪い夢を見たのか知らないけど、大丈夫だよ。それは、ただの夢なんだから」

「違う……違うんだ、サクラ……！」

クロウはぼろぼろと涙を流しながら、彼女を抱きしめる腕にさらに力を込める。

（あれは夢なんかじゃない……！　あの未来は……たしかにこれから起こることだ！）

今が十年前ならばクロウはまだ十五歳。

この時代、まだ世界は平和なままだ。

だが……またあの破滅の未来が訪れないとも限らない。

そこで思い出すのは、未来でリィンが残した言葉だ。

『私が世界を滅ぼす前に、どうか私を殺してちょうだい』

その意味を、クロウはようやく理解する。

すべての元凶となるリィンを今のうちに排除すれば……きっと未来は変わるはずだ。

（いいだろう。やってやろうじゃないか、リィン）

全身にかつてないほどの力がみなぎっていく。

仇討（かたきう）ちと償いのためだけに生きてきた男は今、新たな使命を得たのだ。

（俺は……あいつを殺して、今度こそこの世界を救って

みせる！）

◇

クロウが決意を燃やすのとほぼ同時刻。

都から遠く離れた別荘地。その奥にたたずむとある屋敷で、ちょっとした事件が起こっていた。よく磨かれた床にはカップの破片が散乱し、こぼれた紅茶がテーブルから滴（したた）り落ちる。

「姫様、姫様。いかがいたしました」

「こ、ここは……」

突然倒れた主人のことを、魔道人形のメイドが揺り起

こす。

やがて彼女は目を覚まして、真っ青な顔であたりを見回し……呆然とつぶやいた。

「もしかして……私は、戻ってきたの？」

「はい？」

相反する少年少女がセカイを再構築する
ヒロイックファンタジー大作

2019年2月15日頃
全国の書店さまで発売！

著：霜野おつかい／イラスト：イセ川ヤスタカ